

# 日本大正村 — 「大正百年事業」

—大正百年を機に、さらに感じてもらえる「まちごと博物館」へ—

社団法人中部開発センター

客員研究員 坂口香代子

企画事業部 水野 南緒

西暦2011年(平成23年)、岐阜県恵那市明智町にある「日本大正村」では“大正百年祭”が企画されている。中部圏には、この日本大正村の他に、博物館明治村(愛知県犬山市)と日本昭和村(岐阜県美濃加茂市)という、時代を冠にした3つの“村”がある。各村とも時代をテーマにしたテーマパークという点では同じだが、他の2村が、村をつくるためのスペースをつくり、囲い込み型の観光施設となっているのに対し、日本大正村は「明智町」というまちがそのまま「大正村」になっている。実は、この日本大正村は、知人ぞ知る、町づくり、村おこしの先駆者であり、今も一つのモデルケースとなり続けているところである。その姿と2007年から始まった大正百年事業について紹介する。



## 1. 「日本大正村」の概要

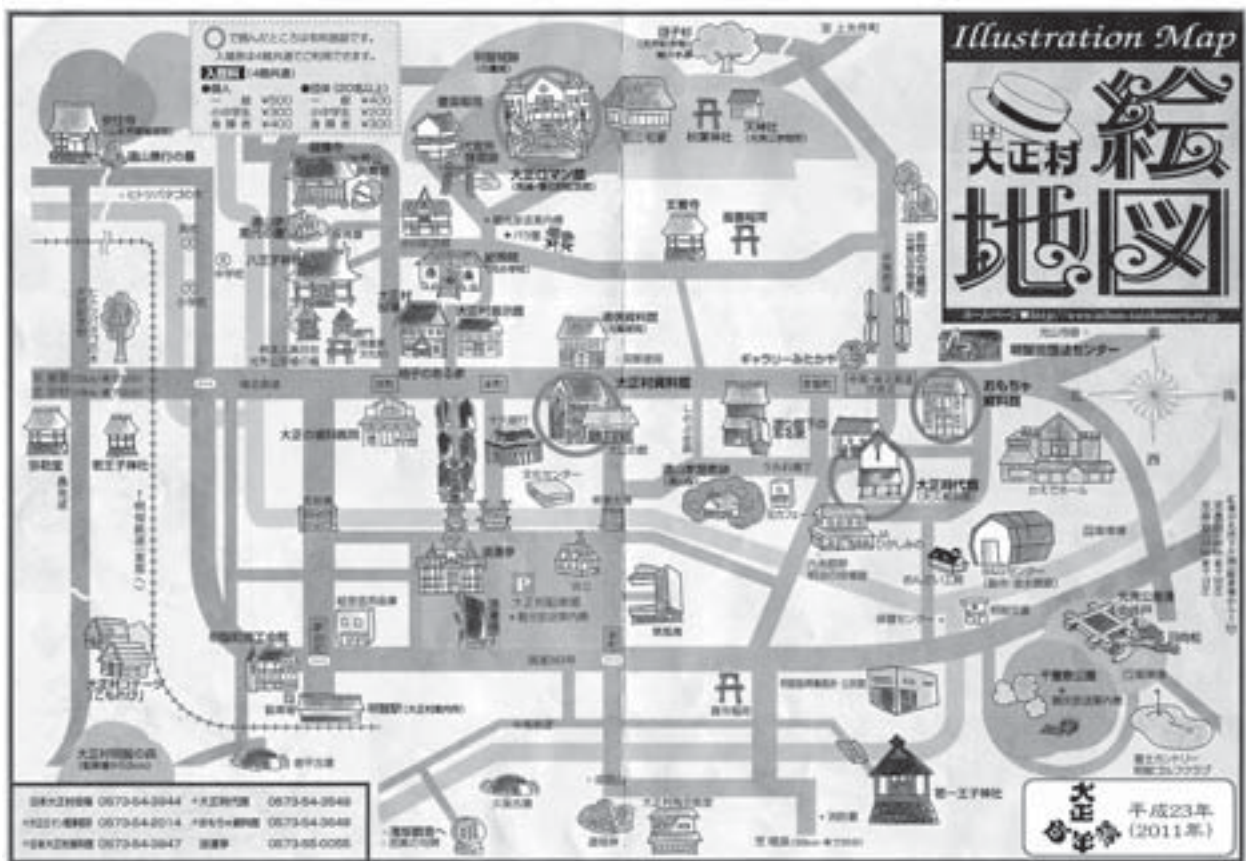
### 町ぐるみ大正博物館

「日本大正村」は、岐阜県恵那市明智町（当時恵那郡明智町）の地に、1984年（昭和59年）5月に立村（大正村の建設を宣言）し、1998年（昭和63年）に正式に開村した、「大正」という時代をテーマにしたテーマパークである。しかし、この大正村には、購入した入場券を渡して入るゲートはどこにもない。「明智町」という実在し生活する町

そのものが「日本大正村」だからだ。

その点で、「博物館明治村」や「日本昭和村」のような囲い込み型のレジャー施設とは性格が違い、この「一つの町が、過去の一時代を内容的に持つ」という試みは、かつてどこにも例をみない取り組みで、今もこの日本大正村しかない。

大正ロマン館、大正村資料館、おもちゃ資料館、大正時代館の4施設に入館するには共通入場券（一般500円、小中学生300円）が必要であるが、それ以外の施設を見学するのに入場料は不要である。



#### ■大正村役場

1889年（明治22年）4月の町村制公布施行と同時に町制をしいた明智町に、1906年（明治39年）に庁舎として建てられた建物。瓦葺きの寄せ棟造り2階建ての木造洋館で、当時としては目をみはるほどのモダンな建物だった。1957年（昭和32年）9月まで明智町役場として使用され、現在は大正村役場として活用。無料休憩所にもなっており、誰でもお茶がいただける。2階には村長室も。また大正村に関わる町民がいつも寄り合う“集合場所”でもある。





■大正ロマン館とバラ園

大正のモダンなイメージの洋風建築で初代日本大正村村長高峰三枝子氏、同村議会議長春日野清隆氏の記念館。明智町出身の日本の油絵の先駆者の山本芳翠画伯の直筆画の展示室もあり、他にも、大正時代に関する資料などの企画展示も定期的に行っている。6月上旬にはバラ園が満開となり、訪れる人を楽しませている。



大正村資料館入り口

大正文化の象徴でもあるレコードの展示



カラフルな蓄音器が並ぶ展示室



入口の売店。ボランティアの方々が笑顔で迎えてくれる

■大正村資料館

明治末期の建物で木造百畳敷き一部4階建て、手動のエレベーター付きの当時としては巨大で貴重な建築物。農家から預かったり、買い取ったりした『繭』を収納するための銀行の繭倉で、生糸の町の名残である。倉の入り口には売店があり大正村の名物おみやげを販売しており、無料で椎茸茶を振舞うサービスも。

全館六室の展示室があり、明治・大正の教科書や蓄音機、明治から昭和初期にかけての教育や文化、嗜好品など当時の生活を垣間見ることができる。また、資料は倉の1階から3階を利用しており、手動のエレベーターの名残も見ることができる。



■大正の館

大正村資料館南隣にある大正の館。2階建ての家屋は明治の末期に建てられた当地の名門、橋本家の住居跡で大正時代の生活様式を象徴的に残しており、巨大な金銭登録機（レジスター）など多くの大正文化を十分に味わう事ができる。



■通信資料館  
(元郵便局)

明治8年に開局したこの地方で最も古い郵便局。モダンな出庇に欄間風の彫り物を加えた数少ない大正モダン建築の一つ。電話交換機、電話機の移り変わりを現物で陳列し、明治、大正から現代に至るまで郵政、電信の歴史が一目で分かる貴重な資料館。



■大正路地

明治の終わり、大正時代に年貢米を納めた米倉と江戸時代から続いた呉服問屋の蔵が並ぶ昔ながらの路地。蔵の白と黒のコントラストが鮮やかで美しく、日本大正村を代表する景観。数個の棧（さん）を外して外壁の黒い羽目板を取り外せば、たちまち一面の土壁となって防火壁の役目を果たし、窓を閉ざせば外からの延焼を防ぐなど、素晴らしい工夫が施されている。



■天久資料館とカフェ

文化人のたまり場で、映画の黒沢明監督、作家水上勉さんらもよく通ったといわれる京都の老舗元カフェ「天久」を1986年（昭和61年）閉店後、復元。1階は喫茶店、2階は展示室。喫茶では、懐かしい蓄音機を聴きコーヒーを飲みながら大正ロマンを味わう事ができる。





## 町民ボランティアによる運営

日本大正村の初代村長は女優の高峰三枝子さん。現在は同じく女優の司葉子さんが二代目村長を務め、村議会議長には鳥羽水族館名誉館長の中村幸昭（はるあき）氏、助役に名古屋学芸大学長の井形昭弘氏が就任している。

運営は「財団法人日本大正村」が行っているが、その大きな特徴は、施設の管理や各施設での接客、売店業務、掃除、湯茶のサービス、そしてガイドといった大正村に関わる日々の業務のほとんどを、町民による無償のボランティアで行っている点である。前ページの写真で紹介した天久のカフェの女給さんもボランティアの女性が持ち回りで担っている。これらは「日本大正村実行委員会」として組織され、企画、広報、総務、財務、文化、渉外の6つの委員会で構成されている。正規の委員は123名、他に、村役場と資料館に交替で詰めるボランティアと町三役、正副議長、教育長も運営委員として参加する官民一体の組織である。

事務局長のほか常勤する4名の事務局員以外には給料は一切支払われておらず、それは、司葉子村長についても同じである。司村長には就任以来、実際に大正村に足を運んでもらうことも多く、村の運営について度々助言をもらっているが、大正村への旅費と食事代以外の謝礼は一切支払われていないとのことである。これは、まさに町づくり・村おこしとして日本大正村が始まったことがその根底にあり、次の「日本大正村の歩み」の中で紹介したい。

## 2. 「日本大正村」のあゆみ

### 発案者は澤田正春さん

明智町に大正村の構想が持ち上がったのは1983年（昭和58年）のこと。明智町の橋本満資さんが、『木曾路』などの写真文集で知られる澤田正春（故）さんとした食事の雑談がきっかけだった。

澤田さんは、兵庫県明石の出身で、土工として日本各地を転々とし、1957年（昭和32年）に木曾谷の水力発電所建設現場で仕事に従事。その頃から

木曾谷の風物を借り物のカメラで撮り始め、それに説明を加えた写真文集『木曾路』が、1965年（昭和40年）に東京・木耳社から出版され、反響を呼んだ。続いて同『木曾街道』、さらには同『緋の道』を出版。木曾谷というイメージを木曾路に変え、馬籠・妻籠を世に送り出した人である。

人を介して橋本満資さんと知り合っていた澤田さんは、橋本さんにかねてから温めていた大正村の構想を打ち明けたのである。「ありのままの町でいい。大正村の看板を立てれば、人は集まる」と。

当時、明智町では、町の過疎化に拍車をかけるだろう国鉄明知線の廃止問題に頭を悩ませていた。橋本さんは悩んだあげく、「澤田さんの大正村構想は町の活性化に結びつくかもしれない」と考え、澤田さんを町役場や町の有力者に次々と紹介して、大正村構想を訴えたのである。しかし、役場や町の有力者、議員の大半が大反対。それまでの明智は、東海自然歩道のハイカーがふらっと立ち寄る程度で、観光客が来ると、それが話題になるような町である。そんな町に「看板を立てただけで人が集まるなんて暴論だ」、「この宇宙時代に、古くさすぎる。世間の物笑いになるだけだ」というのが反対派の意見だった。

「3,300もある市町村の中で、なぜ、この明智が大正村にならなきゃいけないのか？ 明智でなきゃならないという必然性がどこにあるのか？」

これが、多くの明智町民の偽らざる思いだったと推測できる。「町づくり」「村おこし」などという言葉は、まだ一切語られなかった時代である。当時の明智で、町がまるごと博物館になるなどということは、想像できなかったのだ。

### 「ここが集合場所」という大正村構想

数少ない推進派の一人で現大正村理事長・当時明智町助役であった平林さんは、「鉄道問題を何とかしなければいけない時に大正村ごときにうつつを抜かしている」と強く批判されたそうである。

しかし、結局、その鉄道問題が、大正村推進の突破口を開く。国鉄明知線の廃止が時間の問題となり、第三セクターとして明知鉄道を残し育てる

ためには、大正村建設という冒険に踏み切るほかないという思いを強くした住民有志が、多くの反対派の人々に必要性を訴え続けたのである。

その熱意がようやく実り、大正村構想の是非が委ねられた明智町観光協会の1983年（昭和58年）9月25日に開かれた全員総会で、大正村構想に対しGOの決断が下ったのである。

実は、この大正村構想、平林さんによると、澤田さんは当初、木曽でも駒ヶ岳でも岩村でも、また恵那でもいいと考えていたという。当時はそれらのどこにも大正時代を彷彿とさせる佇まいが残っていたからだ。とにかくどこでもいいから大正村という構想を生かしたいと考えていたのである。その思いが『日本大正村 町おこし運動-明智の変』（内海紀章著）にこんな言葉で載せられている。

大正村は、やさしく言えば、大正時代に興味のある人、関心のある人、懐かしい人、勉強したい人なんかが集まり、わいわい語り合い、交流し、これが刺激になって、できたら日本の将来なんかもふと考えさせちゃうような所。まあ、青空公民館ですな。明治村のような立派な歴史的建造物があればそれに越したことはないが、なくたって構わない。立派な建物が二つ、三つあったところで人は集まりますか。日本大正村の看板が立ち、「ここが集合場所ですよ」と告げているから、人が来るんです。「大正村にあるのは、看板だけだ」という声もあるが、恥ずかしがることはない。だいたい物で勝負しようという発想が間違っている。物で勝負したら、地方は東京にかなわないのだから。

この澤田さんの思いが最終的にたどり着いたところが、明知鉄道の終点「明智」だったのである。

## ボランティア出陣！

1984年5月6日、大正村設立準備委員会は「日本大正村」をつくることを宣言する立村式を挙行了した。いわばこれは日本大正村の旗揚げであり、

開村はその4年後の1988年だが、大正村では、この立村式を日本大正村の始まりととらえている。大正時代を彷彿とするモダン建築で評判だった旧町役場に「日本大正村役場」の看板を掲げ、事務所を設置した。大正村設立準備委員会は、翌年の6月28日には大正村実行委員会に生まれ変わるが、この組織こそ大正村を運営する住民組織に他ならない。

立村式のあと、まず始まったのが、町内の女性のボランティアによる観光客への湯茶サービスである。そして5月10日から、初のイベントとして、町出身の画家・山本芳翠の絵画展を開催した。

すると早くも「看板を立てれば人は集まる」という澤田さんの言葉が的中する現象が起きた。日本大正村旗揚げのニュースが流れると、昨日までと何ら変わらない明智に、続々と観光客が押し寄せてきたのである。

観光客の訪れが予想よりもはるかに早い状況に、駐車場も案内所も土産物屋も、そしてトイレなどの施設も対応できず、また案内コースも設定していないありさまの中で、お叱りを受けることもしばしば。しかし、そうであったがゆえに、もともと明智町の人々が持っている人情が湧き上がってきて町の人たちがボランティアに立ち上がったのである。明智町には、「ちょっとおんさい、よっつくんさい（ちょっと来て、寄って下さい）」とあいさつを交わす習慣があり、日本大正村はこの精神を受け継いだ。建物などの説明の看板もない中で、町の人たちによるボランティアガイドが生まれ、村の建物を説明したり、案内したりするといった形で、観光客を接待したのである。「それが訪れた人たちに大変好感を持たれ、他の観光地にはないものがここにはあると思っていただけ」という。

当時の観光客の声を拾った、大正村の中にある某店の「楽がき帳」では、5対1の割合で満足派の方が多かったという。「田舎の親類の家に遊びに来たような、そんな親しみ、懐かしさ、ぬくもり」などに観光客は大きな魅力を感じたようだ。

日本では、1995年（平成7年）1月17日に発生

した阪神・淡路大震災をきっかけに、それまで主としてボランティアに携わってきた人々とは異なる多くの市民が災害ボランティアとして参加したことから、この年を「ボランティア元年」と呼ぶが、大正村では、その10年前にボランティア元年が始まっていたのである。

### 町民による「日本大正村実行委員会」の設立

しかし当時、「準備不足により、多くの観光客にご迷惑をかけている」点も紛れもない事実であった。そこで、立村から約1年後に大正村設立準備委員会から「日本大正村実行委員会」に衣替えしていた大正村の運営組織は、三宅重夫会長を中心に、明智町挙げての、より強力な大正村建設運動の展開に踏み切ったのである。

町民から日本大正村を魅力ある村にするさまざまなアイデアが出てきた。問題は、そう、お金である。

実は、日本大正村は、町の人々のボランティアという形の無償の奉仕で支えられているだけでなく、実行委員会をはじめとする有志が自らお金を出し合い、日本大正村の整備にあてるといふ、町民からの寄付によっても支えられているのである。

1985年度（昭和60年度）から3か年の計画で、自治省の「町づくり特別対策事業」による交付金が出たが、予算は3億600万円。国が2億600万円を出してくれるが、残り1億円は地元負担というものである。これに対し、明智の町税収入は、年に5億8,000万円。実行委員会が「町が1億円全額出すのは大変だろうから、5,000万円は自分たちで何とかしよう」と申し出て、住民から寄付を集めたのである。住民や地元企業は、明知鉄道の第3セクター化に際して寄付金を出したばかり。しかしそれでも実行委員会の呼び掛けに応えた。目標の5,000万円には届かなかったものの、4,000万円近く集まったという。人口7,800人の町で、この金額が集まったのである。平林さんは、「私も当時、50万円というお金を捻出して寄付しました。後ほど家内に見つかって、『どういふお金？』

と問い詰められ、大変でした」と笑う。

### 村長・助役・村議会議長を設け、「日本大正村」開村

日本大正村は、1988年（昭和63年）4月17日、村長に高峰三枝子さんを迎え、正式に開村した。そして、助役には元警視總監の国島文彦さん、村会議長に日本相撲協会の春日野清隆理事長（元横綱 栃錦）が就任。3人はいずれも大正生まれでつくる「東京大正会」のメンバー。明智に大正村があることを知り、ここを東京大正会の故郷としようということでお付き合いが生まれ、高峰さんの村長就任が決まった。さらに相談役に国語学者の金田一春彦氏と上松陽助岐阜県知事が就任。（役職などはいずれも当時）

### 全国各地にいる “大正村応援団”

日本大正村のこれまでを語るのに、もう一つ忘れてはならないのが、日本各地に応援団がいることである。実は、この日本大正村は、明智町民でなければ村民になれないわけではない。同村の主旨を理解し、登録料1万円を払えば、誰もが「村民」になれる。現在、その数は1,200人を超えている。貴重な資料や収蔵品を提供してくれている人も多く、大正村で展示されているものは、ほとんどが善意による寄贈と借り物である。平林さんは「一つには、共鳴していただける方と親しく本当のつきあいをしているから。そして、“住民みなボランティア”ということ、知恵はないが心意気はある（笑）。だから、私もボランティアで助けてやろうと思っていただけなのでしょう」と言う。

まだ開村前にこんな出来事があった。1985年（昭和60年）5月、大正村資料館で「竹久夢二展」が開かれた。夢二の版画72点は、東京都文京区弥生2丁目の弥生美術館が無料で貸してくれたもの。その版画が大正村に運び込まれた時に騒動は起こった。大正村側は実行委員会の幹部12人が出迎え、美術館からは理事が同行してきた。当初、実行委員会側は大正村役場に夢二を展示するつもりでいたが、同行してきた理事から場所として無用



心すぎると指摘され、資料館に変更。その資料館で、今度は二本の糸で額縁をつなぎ、連ダコのようにして壁一面に所狭しとぶら下げて、理事をあきれさせた。あまりのずさんさに「あなた方は小学生以下だ」という言葉も飛び出し、それに対して当時の町文化財保護委員長が「バカにするな」とやり返す。そんな一触即発の雰囲気の中で、夕方から始まった展示準備は深夜2時過ぎにようやく終わった。しかし、この理事はその後、「人間が求めているものが、あそこにはある」と熱烈な大正村支持者になったのである。けんかさえ、「大変気持ち良かった」出来事として記憶されたのだ。そしてその後、大正村は弥生美術館の絵画をほとんど無料で借りることができる文化協定を弥生美術館側と結ぶ間柄となったのである。

また、大正村資料館の2階に展示してある世界の蓄音機は、豊田市の永田和之さんから無料で借りているものである。仕事のかたわら、古いラッパ蓄音機がかもし出す人間臭さ、温かみに心を打たれ、遠くロンドンの「のみの市」にまで出かける収集家である。1984年（昭和59年）の8月に夫人と連れ立って立村間もない大正村に遊びに来た時に、村役場につめていた町民の一人が町を案内してくれ、道すがら自宅に招き入れ、コーラのもてなしを受けた。そして案内してもらい見た資料館は、がらくたのような農機具や大八車の輪っば、茶碗のかけらなどがころがっているだけ。来る前は明治村が妻籠みたいところだと思っていた夫妻の期待は見事にはずれたが、そのないないづくしと町民の親切とが、永田さんの男気をゆさぶった。「大正村にぴったりの明治、大正時代の蓄音機をたくさん持っているの、貸してあげる」と永田さんから申し出があったのである。

他にもこのような話は枚挙にいとまがないようで、寄贈者は実に多数にのぼる。現在、ここ日本大正村には非常に貴重な資料が集まっているのである。

### 3. 「大正百年事業」

#### 「大正」という、かけがえない時代の検証

日本大正村は、このような取り組みの中で、それまで観光客など皆無だったまちに、現在年間15万人、1995年（平成7年）度までのピーク時には年間50万人に達する観光客を呼び、町づくり・村おこし事業の先駆者であり成功例として高く評価されている。

しかし、ここ近年はその集客力に、少し陰りが見え始めている。その中で、現在進められているのが、2011年（平成23年）の「大正百年祭」に向けた大正百年事業である。

大正は、明治と昭和の間にあったわずか15年という短い時代。しかし実は、その短い間にそれまでの日本にはなかったさまざまなものが生まれた非常に濃密な時代だったのである（コラム参照）。平林さんは「大正時代を勉強すればするほど、日本人にとってかけがえのない“大きな時代”であったことがわかる」と言う。

特に「大衆化」という視点で見ると、その勢いが一気に花開いた時代である。「大正デモクラシー」と呼ばれる民主主義が台頭し、民衆と女性の地位が向上、西洋文化と融合した大衆文化「大正浪漫」が花開いた。今日に続く日本人の生活様式もこの時代にルーツが求められるものが多い。一方で、最近では、第二次大戦後の昭和後期からは、余りにも急激に近代文明が発展を遂げ時代が進歩したことで、大正時代は人々が心豊かに生きていた「旧き良き時代」であったとして、当時の文化事象を取り上げ、再評価もされてもいる。

スポーツにおいても、毎年人々の心を熱くする現在の高校野球の前身「全国中等学校優勝野球大会」や「箱根駅伝」も大正時代にスタートしている。日本の童謡も、ほとんどが大正生まれだという。

「つまり、現代の私たちに大きなものを残してくれた時代」であり、大正百年を機に、今まで明治と昭和の影に隠れていた大正という時代を検証し、それを紹介する中で、次の時代へ残すものを温め直そうというのが、大正百年事業の意義である。



## 【コラム・大正時代とは】

明治と昭和という激動の時代の真ん中に、1912年から1926年までの足かけ15年間存在した大正時代。それは文明開化によって西欧化が進みながらも江戸時代の習慣を色濃く残す明治時代を経て、新しい産業や科学技術、思想が浸透したことにより、あらゆる意味で近代文化を確立した時代でもあった。第一次世界大戦による好景気を背景に都市文化が発達するなど、今日の生活様式にも大きな影響を及ぼしている。

### 社会

- 造船、鉄鋼、化学など工業の急成長
- メートル法公布（大正10）
- ガス・電気の普及

### 都市・交通

- 交通手段としての自動車の台頭
- 関東大震災（大正12）以降インフラの整備  
→新宿、渋谷など副都心の形成
- 阪神急行電鉄により大阪平野が  
「住宅衛星都市群」として発展
- ビル、オフィス街の形成

### 文化

- 新聞の普及
- 歌劇、絵画、音楽、  
映画（活動写真）等娯楽の普及
- ラジオ放送開始（大正14）
- セーラー服の採用（後期）

### スポーツ

- 高校野球開始（大正4）
- 箱根駅伝開始（大正9）
- 東京六大学野球開始（大正14）

## 日本三村サミット

正式には、大正百年事業の事務局は、日本大正村ではなく、岐阜県恵那市役所商工観光課の「大正百年事業実行委員会」である。2004年の市町村合併で、明智町はそれまでの恵那郡明智町から恵那市明智町となっている。

大正百年事業実行委員会により、2007年9月に、大正百年祭に向けた最初のカウントダウンイベント、「大正浪漫コンサート&シンポジウム」が開催され、大正百年までの日数をカウントダウンするカウンターの除幕式が行われた。さらに翌年2008年9月には「大正浪漫シンポジウム」を開催。西洋文化の大衆化、都市基盤の整備など生活様式の変化によって医療はどのように変わったかを文学から読み解くパネルディスカッションなどが行われた。

そして2008年11月3日には、一大イベント「日本三村サミット」を開催。

大正百年事業実行委員会が呼びかけ、岐阜・愛知両県にある博物館明治村村長・小沢昭一さん、日本昭和村村長・中村玉緒さん、そして日本大正



大正百年祭に向けた最初のカウントダウンイベント「大正浪漫コンサート&シンポジウム」。安田姉妹と明智中学校1年生60名による「青い山脈」「翼をください」の合唱。

村村長・司葉子さんという3村の村長が、日本大正村（恵那市）で初めて一堂に会し、3時代の心と文化を後世へ伝えるサミットとして開催された。

サミットのコーディネーターには、鳥羽水族館の中村幸昭名誉館長を迎え、3村長がそれぞれの時代の特徴を紹介。最後に各村にある貴重な時代遺産の保存活動を盛り込んだ共同宣言を採択した。

同時に、現在、3村では共同で誘客キャンペーン「三村物語」も展開しており、この中部圏にす

べてある明治・大正・昭和の各テーマパークの今後にも大きな注目が集まっている。2009年度は、まだ内容は決まっていないが、引き続きカウントダウンイベントが開催される予定である。

## ノボリを上げることで生まれる 新たな連携を

また、大正百年事業では、「大正百年」というノボリをあげることで生まれる新たな連携も図っていきいたいということだ。

例えば名古屋発祥の「大正琴」が2011年に誕生100年を迎える。大正琴の協会からは、大正百年を期に日本大正村を大正琴の聖地にしたいという話も来ている。こういった提案が、大正百年祭のノボリを上げたことで、どんどん集まってきており、現在、大正百年祭に向けて連携をとって取り組みを進めていこうとしている。



「日本三村サミット」ポスター

### 【日本三村サミット共同宣言】

このたび私達三人は、明治・大正・昭和それぞれの時代を改めて検証し、これからの時代に役立つものを探し出し、それを磨いて遠い未来へまで伝えよう…という考えの下に、本日初めて一堂に会し、話し合いをいたしました。

今、この地を改めて踏みしめながら、便利さと効率性を優先する現代の流れの中で、とかく忘れられがちな、日本の原風景、そして貴重な文化遺産を再認識し、それとともに、何故かこみ上げてくる不思議な懐かしさを、抑えることができませんでした。

明治・大正・昭和…、それは、我々の心の片隅に眠る原風景。ここへ足を運べば、三つの村は、いつでもあなたを優しく包んで、それぞれの時代へと誘ってくれる。

ここは、単に歴史の移り変わりを伝えるだけの場所ではなく、あなたが、そして私が、自分の人生を振り返ることの出来る空間としていきたい。

これからも三つの村はしっかり手を組み、それぞれの時代の心と文化を発信して、未来の子供たちへ大切な遺産として保存・伝承するとともに、観光の振興にも取り組んでいく志の変わらぬことを確認し、ここに宣言いたします。

平成20年11月3日

博物館明治村村長 小沢昭一  
日本大正村村長 司葉子  
日本昭和村名誉村村長 中村玉緒



サミット前には、会場まで3村長が人力車に乗ってパレードを行い、沿道をにぎわせた。



パレードの先頭はにぎやかにちんどん屋が務めた。

## インタビュー

(財)日本大正村 理事長 平林 典三 氏  
 恵那市役所経済部商工観光課観光交流室長  
 ・大正百年事業実行委員会事務局  
 千藤 秀明 氏



平林理事長（右奥）と恵那市役所・千藤さん（左奥から2人目）と日本大正村実行委員会の方々。この笑顔の前には、大正百年事業について、真剣に議論を交わしながら打ち合わせが行われていた。

—2004年の市町村合併で、明智町は恵那市に入り、今回の大正百年事業も恵那市との協力のもと進めておられます。平林理事長は、日本大正村にとってこの合併をどう考えておられますか？

**平林** 私は長く行政にいたのでよくわかりますが、小さい町村ではもうやっていけません。合併したことで、市全体で人も減らし、予算も減らしという状況にありますが、私はそれに泣き言を言うのではなく、それを理解し、逆手にとって恩恵をこうむるような活動をしていかなければならないと思っています。

—市としては、どうお考えですか？

**千藤** 大正百年事業は、市役所にとっても、非常に大きな意味を持つ事業です。

恵那市は、合併後、豊かな観光資源を持つ市になりました。しかし残念ながら例えば飛騨高山のような一流の観光地ではありません。つまり、恵那市の観光というのは、「日本大正村や岩村城跡や恵那峡など、いろいろなものがある」という回遊するシステムをつくり、みんなで連携してやっていかないと成り立たないということです。そこ



で、恵那市では合併後、いち早く2006年の6月には観光協会も恵那市観光協会に一本化しました。中津川も高山も下呂も合併してもまだこのように一つになっていません。恵那は、先の3つの観光地の他に、単体では弱いけれども寒天で有名な山岡町にある「おばあちゃんの市・山岡」、市街地からほど近い高原にあるスケールの大きな牧場「東濃牧場」、美しい曲線を描く「石積み」の畦が全国でも珍しい「坂折棚田」等々、バラエティに富んだ観光資源がある。そこで例えば、「恵那市」を名古屋から1時間のひとつの日帰り観光圏として考え、「回遊して楽しめるよ」ということを知ってもらうためのガイドブックを、観光協会を一本化したのと同様につくりました。「この帰りに山岡のおばあちゃん市に寄って帰ろう」とか、「あそこまで行ってみよう」とか、恵那の観光資源を回っていただくことによってでないと、恵那の観光資源は磨かれませんか。地元の人が自分で気付かない観光資源というのは実はたくさんあり、人に来てもらうことでそれに気付かせてもらうこともある。そして、内面的には自分が自信を持つことができるのです。「日本大正村」がその一つの非常にいい事例だと思います。日本大正村も岩村も、同じ村でも、明治村や昭和村と違い、生活した町を皆さんに見てもらえるものなので、恵那の観光は、あくまでも地域振興、町おこしにつながらないと意味がないからです。

**—その中で、千藤さんは大正百年実行委員会の事務局も担っておられますが、今年の大正百年事業はどのようなことを計画されているのでしょうか？**

**千藤** 今、ほぼ決まっているのは、「大正百年まであと2年大正浪漫シンポジウム」と「大正琴」に関係するイベント、そして「なんでも鑑定団in日本大正村」です。この誘致はテレビ局と調整し、すでに決まっています。大正百年を発信することによって日本大正村に来てもらう。そして恵那市の観光ポイントを回ってもらうようにするのが私たちの役割ですから、メディアへの露出度を上げ

ないといけない。大正百年に向けてのニュースをどんどん発信していくことだと考えています。

**平林** 要は、2011年に我々日本大正村が何をやるか。これには本当に頭を悩ませています。お金がありさえすれば、何でもできるが、大きなことをぶち上げてできなかったではいけませんから。昨今の経済情勢の中、非常に厳しい。けれど、厳しいからこそ、この大正百年を生かさないといけないと思うのです。司村長をはじめ、全国におられる日本大正村の村民のお力も借りて、今、お金をかけずとも皆さんに喜んでいただけるイベントをしっかりと考えていきたいと思えます。

司葉子さんには本当にいろいろと尽力いただいています。去年は月に1度のペースで来ていただきました。大正村に惚れていただき、ボランティアでやっていただいているのですから、本当に感謝していますし、頭が下がります。

**—では、日本大正村が、今、もっとも取り組まなければいけない課題は何でしょうか？**

**平林** 一番の課題は、やはり何と言ってもボランティアスタッフの人材問題でしょう。今、だんだんと次の世代の人に移行している段階で、比較的スムーズにいつているとは思いますが、ただ、大正村はボランティアが基本ですから、最初からボランティアに共鳴していただける方でないといけない。そういう点からいうと、ある程度の年齢にならないと余裕ができないということで、若い人に大正村に関わっていただくことができにくいことが悩みの種です。

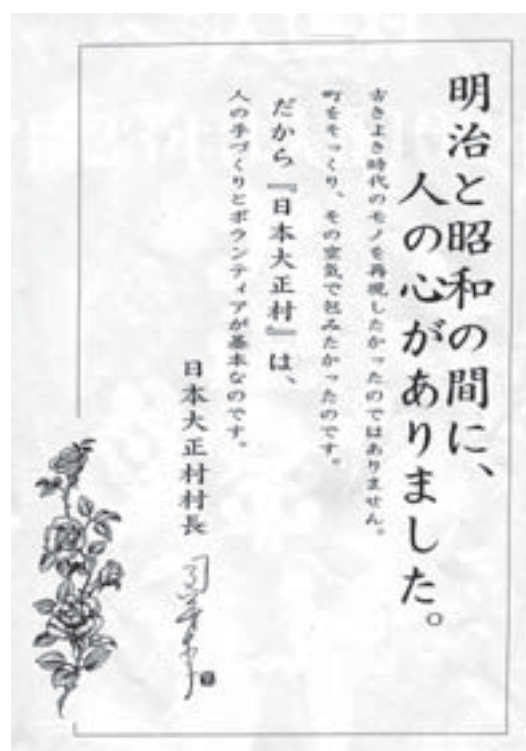
また、もう一つ、頭を悩ませているのは、どんどん集まってくる貴重な資料や物を保管する場所、そして展示する場所がないことです。大正の物というのは、どこが大正でどこが明治だというのが難しいのですが、すでに集まっている数は数万点。SPレコードは1万点近くあり、蓄音機もかなりの数が揃っていますし、それ以外の楽器も千数百点あります。最近ではオリンピックの資料。第一回のアテネからのものが全部揃っています。趣味で集められたものを寄贈していただいたのです。

ただ、問題は一括で置いておける収蔵庫や展示するスペースがないこと。単に箱物をつくるというのでは、この日本大正村の理念にそぐいません。この前、喉から手が出るほど欲しかった大正時代の建物がありました。しかし残念ながら手に入れることが出来ませんでした。司村長も大正百年に向けてそれらの貴重な資料をどうしていくかを心配しておられました。ただ、物が集まると、それを研究したいという人も集まってきます。そういう方たちとの交流を通じて、大正百年にそれをどう残すか、そして百年以後、それを活用してどのように地域の活性化につなげていくかというのが、今、我々に課せられた使命であろうと思っています。

それを解決する一つの方法として検討しているのは、空き店舗を活用したテーマ別展示。生活をしている街の中の良さを見てもらって、町民の人と触れ合いたいというのが日本大正村のコンセプトです。ここは何々資料館、ここは何々資料館というふうに、とにかく歩いて回ってもらえる形の町づくりをする中で、資料の有効活用を考えていきたいと思っています。ある意味、デメリットをメリットに変えてきたというのが、これまでの日本大正村の歩み。大型の資料館を建てるスペースはこの大正村にはないけれど、家々が連

なっているから、その中の空き家を空き家対策も兼ねて資料館にして開放したら、見て回りやすい、まさに今以上に「まちごと博物館」になるわけです。

大正百年に向け、見てもらうだけの場所ではなく、今以上に何かを感じてもらえる日本大正村にしていきたいと思っています。



## 日本大正村の概要

- 場所 岐阜県恵那市明智町
- アクセス
  - JR中央線 瑞浪駅下車 東鉄バス 約45分
  - JR中央線 恵那駅下車 明智鉄道 約50分
  - 明智鉄道明智駅から徒歩 5分
  - 中央道 瑞浪 I C、恵那 I Cより約30分
- 施設の開館時間
  - 午前9時～午後5時（入場受付：午後4時30分まで）
  - ※12月15日～2月末日は午前10時～午後4時
- お問い合わせ先
  - 日本大正村事務局（日本大正村役場）
  - 所在地：〒509-7731 岐阜県恵那市明智町1884-3
  - 電話：0573-54-3944